

# 健康寿命延伸へ 都内で研究発表

## 弘大・岩木地区ビッグデータ活用

弘前大学は4日、東京都千代田区の一橋講堂で、人生100年時代の健康施策を考える「弘前大学COIヘルシーエイジング・イノベーションフォーラム」を開いた。3年以内の病気の発症を予測するモデルの開発など、同大が弘前市岩木地区で行っている健康プロジェクトのビッグデータを活用した最新の研究成果が発表された。

フォーラムは、健康寿命延伸研究「弘大COI(2013～21年度)」が今年2月、内閣府の第1回日本オ



岩木健康プロジェクトのビッグデータを活用した研究成果などが発表されたフォーラム＝4日、東京

特別企画で、京都大学大学院医学研究科の奥野恭史教授が、岩木プロジェクトの2千項目以上にわたるデータを活用した疾患予想モデルの開発にめどが立ったことを報告。高血圧、

糖尿病など主要20疾患が3年以内に発症する確率を予測することが可能となり、さらに発症する理由や過程をスーパーコンピュータで特定することで、健康指導をピンポイントで行うことができる」とした。

約7年の研究で、認知機能の低下と睡眠の質の悪化が関係していることが分かった」と報告。同大学院薬学系研究科の五十嵐中客員准教授は「弘大COIによって、岩木住民の脳卒中、冠動脈疾患発症リスクが減少した」と発表した。

プロジェクトのデータをベースに開発した「啓発型健診」を紹介。健診と結果判定、健康指導を即日行うことを特徴とした健診を国内外に広げ、「寿命革命」を実現させる意欲を示した。

また、地域の取り組みとして、弘前市の「北星交通」の積田裕子総務部次長は、タクシー乗務員の健康チェック体制などを報告した。

(菊谷賢)